

千刈狸の呟き

～ ホウホウホウ・ホウ ～

“ホウセツ”

包接 (inclusion) という全く新しい機序で作用する薬が登場しました。今までの筋弛緩薬のリバースは、敵の敵は味方だからその味方を増やして最初の敵に拮抗しようという、毒をもって毒を制するというものでした。ところが、不必要なところにまで味方が増えてしまい、拳句の果てに別の薬が必要になるという代物で、その上効果の程は今一つでした。これに対し、新しい薬は副作用も殆どなく、筋弛緩薬を投与した直後でもリバース出来るという優れもので、唯一の欠点は薬価が少々お高いということ位しかありません。

この薬、8つのオリゴ糖が環状になり(シクロデキストリン:CD)バケツのような構造をしたもので、シクロ3兄弟と呼ばれるものの1つだそうです。CDが6つの型は食事の中の動物性脂肪を包みこんでしまうダイエット用サプリメントとして、7つからなる型は予め取り込んでいた芳香剤を汗の湿気で徐放して、その代わりに臭い(くさい)臭い(におい)を取り込む消臭剤として、8つの型はDHAやEPAを多く含むマグロの頭の粉末を包み込んだサプリメント等として活躍しているそうです。新しい薬はバケツの縁に側鎖の手を付けてしっかりとホウヨウしています。

“ホウヨウ”

抱擁(hug)と言えば思い浮かぶものがあります。手術のために素肌(bare)になった患者さんを暖かい風で温める器具です。名前はBair huggerなのですが、そのトレードマークが可愛いクマさん(bear)の絵なのです。まるで、お母さんクマが冬籠り中に産んだ赤ちゃんを優しく抱き抱えているようなイメージです。実際にこの温風に包まれてみると、暖かく柔らかい風は心地よく思わず眠りたくていまい。以前は、術中の低体温は術後のシバリングを起し、患者の酸素消費量を多くして有害だということで保温に努めていました。今は、周術期の1～2の軽度の低体温でも、心臓関連合併症を3倍に、手術創感染を3倍に、入院期間を20%延長し、出血量・輸血量を有意に増加させることがわかり、手術中の低体温防止はより重要になってきています。

“ホウヨウ”

ホウヨウとKeyを叩くと、先の抱擁とともに、包容(tolerance)や法要が出てきます。3番目はお坊さんに任せるとして、2つめの包容力のある先輩諸狸のお陰で、こうして好きな事を書かせてもらったり、お門違いの介護認定審査会などにも出させてもらっています。そのため化橋が入局する時に親から「なんだその科は?何のために医者にしたんだ!」と言われたこともありましたが、30年経って母親の介護認定の相談に乗ってあげることが出来喜ばれました。その介護認定ですが、一次判定に、“運動能力の低下していない認知症高齢者のケア時間加算ロジック”という名前も式も複雑な加算があります。つめ切り、洗身、金銭管理などに身体機能、生活機能、精神・行動傷害を加味して、カットポイントを超えると介護区分が一段階上がります。更に、大声を出す、介護に抵抗、徘徊、外出して戻れない、一人で出たがるなどの適応基準に一定数該当するともう一段階加算され、二段階上がることとなります。つまり、介護では手が掛かる人がいるということをお役人が認めているわけです。

“カイホウ”

一方、病院でも手を掛けてあげたいんだらうなあと思うことが毎月1回あります。転倒転落事故の副看護部長さんの報告の中で、「解決策として看護師の見回りを多くします」という言葉を聞かされる時です。看護師さん達は、入院時の転倒・転落アセスメント・スコアシートから始まって、夜間の仕事を日勤帯にシフトするなど患者さんに手をかけてあげる時間を増やそうと懸命に努力しています。先日、救急医学会で聴いてきた野口トマス恒富先生の「医療安全とコロナの歴史」という講演の中に「事故の原因を分析した場合、個人よりも体制に問題があることに気付いて、そこから改革が始まった」という言葉がありました。個人の努力は勿論必要ですが、それとともに体制を整えるための費用も必要です。介護認定には先程のような加算がありますが、病院にはありません。スコアの高い人に加算が付き、看護師さんでなくても看護助手の方など増えれば、見回りも多くなり手も掛けられるでしょう。看護師さんが介抱(nursing)できるようになればと思います。(化橋)